

英語副詞句の階層性

大石 強

0. はじめに

副詞句が種類により構造上階層的に分布することについては、古くから多くの研究により明らかにされてきた (Greenbaum (1969), Jackendoff (1972), Nakajima (1982), Haegeman and Wekker (1984) Quirk et al. (1985), Halliday (1985) 等を参照せよ)。その階層関係について、Cinque (1999) は、ロマンス語のデータを基礎にして、節の機能範疇の主要部 (clausal functional heads) と副詞指定辞 (adverbial specifiers) が 1 対 1 の関係で体系的に一致するという考え方を提唱し、普遍的な機能範疇の階層関係を提案した。従って、機能範疇に対応して副詞も普遍的な階層の中に位置づけられることになる。本稿では、Cinque の主張を概観し、Quirk et al. (1985) 等との先行研究と比較検討する。

1. Cinque (1999) の主張

Cinque (1999:106) は、ロマンス語を基にして、節の機能投射に次のような普遍的な階層があり、対応する副詞指定辞 1 対 1 の一致関係が存在すると仮定している。

(1) The universal hierarchy of clausal functional projections¹

[*frankly* Mood_{speech act}] [*fortunately* Mood_{evaluative}] [*allegedly* Mood_{evidential}]
[*probably* Mode_{pistemic}] [*once* T (Past)] [*then* T (Future)] [*perhaps* Mood_{irrealis}]
[*necessarily* Mod_{necessity}] [*possibly* Mod_{possibility}] [*usually* Asp_{habitual}]
[*again* Asp_{repetitive}(I)] [*often* Asp_{frequentative}(I)] [*intentionally* Mod_{volitional}]
[*quickly* Asp_{celerative}(I)] [*already* T (Anterior)] [*no longer* Asp_{terminative}] [*still* Asp_{continuative}]
[*always* Asp_{perfect}(?)] [*just* Asp_{retrospective}] [*soon* Asp_{proximative}] [*briefly* Asp_{durative}]
[*characteristically*(?) Asp_{generic/progressive}] [*almost* Asp_{prospective}]
[*completely* Asp_{Sg}Completive(I)] [*tutto* Asp_{PI}Completive] [*well* Voice]
[*fast/early* Asp_{celerative}(II)] [*again* Asp_{repetitive}(II)] [*often* Asp_{frequentative}(II)]
[*completely* Asp_{Sg}Completive(II)]

ここで、英語について具体的に検討されている例を紹介しながら、仮定されている副詞句の階層性が厳密であることををみることにする。Cinque は、各副詞が節の異なる位置に独自に「基底生成」されている例として、次の例を挙げている。

- (2) a. John has answered their questions cleverly.
b. John cleverly has answered their questions.
c. John has cleverly answered their questions.

(2a)では、*cleverly* は「ジョンは賢いやり方で答えた」という様態 (*manner*) の意味を表す解釈をもつ。(2b)では、この解釈をすることはもはや不可能である。(2c)では、副詞は「ジョンが彼らの質問に答えたのは賢明だった」という主語指向 (*subject-oriented*) の解釈をもつ。さらに、この2種類の副詞が同時に単一の文に現れると述べている。

(3) John cleverly has answered their questions cleverly/stupidly.

(3)は、「ジョンが彼らの質問に賢い（愚かな）やり方で答えたのは賢明だった。」という解釈をもつ。

(2c)は多義的であり、Jackendoff(1972)によると、副詞が動詞と隣接しているため、副詞が動詞句の内側に位置する（様態の副詞）とも動詞句の外側に位置する（主語指向の副詞）とも考えられるからである。もし他の助動詞が挿入されるならば、この構造上の曖昧性はなくなる。

(4) a. John has been cleverly answering their questions.

b. John has cleverly been answering their questions.

(4a)では、様態の解釈のみが生き残り、(4b)では、主語指向の解釈のみが生き残る。

しかしながら、Cinqueは、「助動詞の位置」にある(4a)の様態副詞の解釈が(2a)の様態副詞の解釈と同一であるというのは疑わしいと述べている。様態副詞の2つの位置を区別しなければならないのは、一方のみが下位範疇化条件を満たし、中間動詞を認可するからであると論じている。

(5) a. John has worded the letter carefully.

b. *John has carefully worded the letter.

(6) a. This bag opens up easily.

b. *This bag easily opens up.²

さらに、両方の様態副詞が同時に現れることを観察している。

(7) John has been cleverly answering their questions cleverly/stupidly.

(5)-(7)の事実は、動詞の後ろにある様態副詞が動詞の前にある様態副詞と変形によって関係づけられるのではないことを示している。

以上のような考察から、制限的な理論は、位置と解釈の間に1対1の関係を強いるものであると述べられている。すなわち、「基底生成」されたそれぞれの位置に固有の異なる解釈があることになる。従って、1つの副詞が2つの異なる位置で同一の解釈をもつように見える場合は、次の3つのうちのいずれかであることになる。第1の可能性は、その副詞が同じ位置を占めており、他の要素がそのまわりを移動しているということである。第2の可能性は、その副詞が移動しており、痕跡と結びついた解釈を保持しているということである。第3の可能性は、その副詞が2つの位置で同一の解釈をもつと考えるのは錯覚にすぎないということである。

最初の可能性が具現化した例は、(2b, c) で *cleverly* が主語指向副詞の時である。

- (2)b. John *cleverly* has answered their questions.
- c. John has *cleverly* answered their questions.

表面上は、副詞と助動詞の位置が入れ替わっているが、助動詞が繰り上げられていると考えられる。³ Baker(1981)は、強勢のない定形の助動詞が副詞を超えて移動することを論じている。

- (8)a. George and Martha probably never *h*ave seen a real politician.
- b. George and Martha *h*ave probably never seen a real politician.
- (9)a. Jack never WAS much of a swimmer.
- b. *Jack WAS never muh of a swimmer.
- (10)a. Fred *h*as never been rude to Grandfather, but John always *h*as ____.
- b. *Fred *h*as never been rude to Grandfather, but John *h*as always ____.

(8b)は、(8a)から、強勢のない **have** が移動されて派生したと主張されている。助動詞が強勢を持たないという条件は、(9)のように強調強勢を受けた定形助動詞が移動することを阻止する。また、(10)のように定形助動詞の直後に省略があると、定形助動詞の強勢が縮約されず、移動が起こらないことも説明される。従って、(2b, c)は、一見異なる位置に副詞が生じているように見えるが、助動詞が移動しているのであって、副詞は同じ「基底生成」の位置を占めているといえる。

第2の可能性を具現化した例は、副詞を wh 移動したものである。

(11) **How cleverly has John worded the letter t?**⁴

第3の可能性を具現化した例として、すでに見た **cleverly** という様態副詞の他に **slowly** の例が挙げられている。

(12) a. **He has been slowly testing some bulbs.**

 b. **He has been testing some bulbs slowly.**

(12a)では、**slowly** は出来事全体を修飾している。すなわち、個々のテストは素早くこなしているかもしれないが、全体としては遅々としてはかどらない状況を述べている。これに対して、(12b)の **slowly** は、個々のテストを修飾しているという違いがある。

以上のように、**Cinque** は、機能範疇と副詞の普遍的な階層を提案すると同時に、それぞれの位置と解釈の間に1対1の関係があると主張している。

2. Cinqueの普遍的階層と先行研究

Cinque の提案した(1)の階層は、概して、先行研究のデータとも一致する。Jackendoff(1972)で観察された文副詞の順序関係を示すデータを見てみる。(1)に現れている *probably* と *quickly* が、Jackendoff のデータにも現れている。

- (13) a. *Probably, Max quickly was climbing the walls of the garden.*
b. *Probably, Max has quickly been trying to decide whether to climb the walls.*
c. *Max probably has quickly been trying to decide whether to climb the walls.*
- (14) a. **Quickly, Max probably was climbing the walls of the garden.*
b. **Quickly, Max has probably been trying to decide whether to climb the walls.*
c. **Max quickly has probably been trying to decide whether to climb the walls.*

すでに(2)-(4)の例のところを見てきたように、(13)の例では、2番目の副詞の直後に助動詞があることから、*quickly* は様態副詞ではない。Jackendoff の用語に従うと、*probably* は話者指向 (*speaker-oriented*) 副詞であり、*quickly* は主語指向副詞である。(13)のように主語指向副詞が話者指向副詞に後続していれば、容認可能となるが、(14)のように順序関係が逆になると容認不可能となる。

上記の事実は(1)の階層により説明できるが、Jackendoff はその他の制約も述べている。例えば、2つの文副詞は隣接して生じないという制約がある。

- (15) a. **Evidently carefully John left the room.*
b. *Evidently John carefully has left the room.*
c. *?*John evidently carefully has left the room.*
d. *John evidently has carefully been concealing the truth.*
e. **John has left the room, evidently, carefully.*

Jackendoff に従えば、*evidently* は話者指向副詞であり、*carefully* は主語指向副詞であり、異なる種類の副詞である。上記の例は、(1)の階層に従うということの他に制約が必要であることを示している。

また、2つの文副詞が同じ意味類に属す場合は同時に生じないという制約もあるとして、次の例を挙げている。

(16) *Usually John frequently leaves Mary at home.

(1)の階層で、*usually* は *Asphabitual* という機能範疇の指定辞に現れるのに対して、*frequently* は *often* と同じ *Aspfrequentative(I)* という機能範疇の指定辞に現れると考えられる。(16)の例は、異なる機能範疇に属すということと、異なる意味類に属すということとは別の概念であることを示している。従って、(1)の統語的階層とは別に意味的分類に基づく制約が働いていることになる。

次に、Quirk et al.(1985)では、副詞類を大きく *Disjunct*、*Subjunct*、*Adjunct* に3分類している。構造上の階層は、概ね *Disjunct* が一番高く、*Adjunct* が一番低く、*Subjunct* が中間という関係になる。しかしながら、*Cinque* と決定的に異なるのは、同じ類に属すと考えられる副詞が移動するということである。例えば、(1)の階層の最上位を占める *frankly* についてみる。*Cinque* の分類で *Speech act* という機能範疇に属すこの副詞は、Quirk et al.(1985)では、*Style disjunct* と分類されている。

(17) a. Frankly, I am tired.

b. Frankly, is he tired?

(18) a. I frankly don't know.

b. I don't frankly know.

(19) I frankly WAS annoyed.

(17b)では、franklyは"I ask you frankly"または"Tell me frankly"に相当する機能を持ち、多義的となる。最上位の副詞が文頭に生じることに問題はないが、否定文の場合は(18)の位置が可能となると述べられている。強調が定形助動詞に置かれた場合は、(19)の位置が普通であると述べられている。すなわち、同じ副詞が文中の色々な位置に現れると考えている。この考え方は、Cinqueの主張する位置と解釈との1対1対応関係という仮説と衝突する。Cinqueに従って(17)-(19)の副詞の位置を説明するには、次のいずれかの可能性がある。1つの可能性は、(17)と(18)、(19)のfranklyは同じ解釈を持つ副詞ではなく、異なる機能範疇の指定辞に生じていると考えることである。もう1つの可能性は、すでに見た定形助動詞の移動だけでなく、主語も副詞を超えて移動していると考えることである。主語が副詞を越えて移動するというを示す根拠は特になく、ここに思われるので、ここでは、1番目の可能性を追求したいと思う。というのも、Quirk et al.(1985:613)で述べられているDisjunct、Subjunct、Adjunctの定義は、次のように意味機能に基づくものであり、境界が明確でないからである。

(20) Adjunctは、文中での役割の重要性やバランスという点で、主語・目的語のような他の要素と類似している。

Subjunctは、一般に、他の文要素より小さい役割を有する。例えば、意味的にも文法的にも独立性が小さく、ある面で文要素のどれかに従属している。

Disjunctは、文要素と比べると優位な役割を有している。文全体にわたる作用域をもつと思われる点で、統語的には分離しており、ある面で上位である。

さらに、Quirk et al.(1985:647)は、franklyという副詞が3つの類に属していると述べている。次がその3種類の例である。

- (21) a. He admitted his mistakes frankly.
 b. He frankly admitted his mistakes.
 c. Frankly, he was contemptuous of the pardon.

(21a)の *frankly* は様態を表す *Adjunct* であり、(21b)の *frankly* は主語指向の *Subjunct* であり、(21c)の *frankly* は *Dsjunct* であると述べられている。(18), (19)の例を見直すと、主語が1人称であることから主語指向と話者指向とが重なっていると考えられる。従って、(18), (19)の *frankly* は、主語指向の *Subjunct* であると分析することが可能であるように思われる。これが正しければ、*Cinque* のように位置と解釈の1対1対応関係を保持していくことは可能であると考えられる。今後は、*Quirk et al.*(1985)を代表とする多くの先行研究が副詞の移動を認めた上で説明してきたことを、*Cinque* 流に分析し直して検証していくことが課題となる。

最後に、*Cinque* の仮説は、機能文法にも影響を与えると考えられる。機能文法から *Halliday* (1985)を取り上げて検討してみよう。*Halliday* は、文頭に来る主題(Theme)の中に *Conjunctive Adjunct* と *Modal Adjunct* が含まれると述べている。*Conjunctive Adjunct* は、*briefly, actually, moreover, however, next, soon, finally, otherwise, likewise* などの副詞を含み、*Modal Adjunct* は、*probably, certainly, frankly, really, evidently, fortunately, hopefully, wisely, foolishly* などの副詞を含む。*Conjunctive Adjunct* は、それを含む節を先行のテキストと結びつける役割を果たし、上位の階層に位置づけられる。*Modal Adjunct* は、当該のメッセージに対する話者の判断を表す。従って、メッセージの中に自分の判断の視点を表現するのであれば、それを出発点にすることは自然であると述べている。さらに、*Halliday* は、複数の主題を有する文が存在し、一定の順序で配列されると考えている。副詞要素に係わる部分では、*Conjunctive Adjunct* が *Modal Adjunct* に先行すると考えている。このような考え方は、大筋として、*Cinque* の階層と一致している。しかしながら、*Cinque* の緻密な普遍的階層は統語的仕組みである。従って、*Cinque*

の仮説が正しいということになるのであれば、統語的な階層と主題・提題 (Rheme) という機能との関係を解き明かし、どこまでが統語論の問題で、どこまでが機能論の問題であるのかを明らかにしていく必要があることになる。

3. おわりに

本稿では、新しく提案された Cinque (1999) の機能範疇と副詞の普遍的階層という主張を取り上げた。この主張には、副詞の位置と解釈との 1 対 1 の対応関係が存在するという仮説が含まれている。(1)に見られる階層関係は先行研究と比べると非常に精緻なものである。この主張に従う観点から、先行研究で明らかにされてきた、①副詞に関する制約、②副詞は移動すると考えられて分析されてきたデータ、③副詞の持つ機能文法的な側面について今後の課題を考察した。

注

*本研究は、『英語及び日本語の副詞類の実証的・理論的研究（課題番号12610488，研究代表者：秋孝道）』として、平成12年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）を受けており、平成14年（2002年）3月の研究成果報告書に掲載されたものを一部修正したものを再録している。

1. (1)で用いられている略号は、次の通り。

Mod	Modal	Sg	singular
T	tense	Pl	plural
Asp	aspect		

英語で対応するものが存在しないため、階層の途中に tutto (everything) というイタリア語の副詞が用いられている。

2. (6b)の文は、open が中間動詞ではなく、非対格動詞としてなら適格である。

3. Cinque 自身も、注で詳細は Baker (1981)を参照せよと述べている。

4. (11)の cleverly は、下位範疇化された様態副詞であり、動詞の後ろに生ずるものである。(7)の動詞より前に生じている様態副詞は wh 移動できない。

*How cleverly has John been answering their questions stupidly?

参考文献

- Andrews, A. (1989) "A Note on the Constituent Structure of Adverbials and Auxiliaries." *Linguistic Inquiry* 13:313-317.
- Baker, C. L. (1981) "Auxiliary-Adverb Word Order." *Linguistic Inquiry* 12:309-315.
- Cinque, G. (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press, New York.
- Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverbial Usage*. Longman, London.
- Haegeman, L. and H. Wekker (1984) "The Syntax and Interpretation of Futurate Conditionals in English." *Journal of Linguistics* 20:45-55.
- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold, London.
- Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Nakajima, H. (1982) "The V4 System and Bounding Category." *Linguistic Analysis* 9:341-378.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.